

さきそう

姫路獨協大学附属図書館報

No. 36 2011. 1

目次

『「地球共生社会」と「国際理解・交流」』
—「開発教育」をめざす「経済開発」から
「人を中心とした社会開発」へ— …… 1

財政学について学ぶことの大切さ …… 5

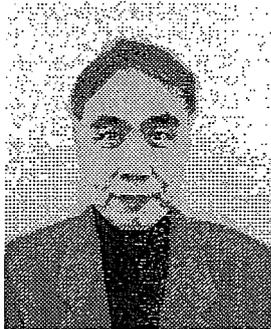
姫路獨協大学附属図書館利用状況の推移 …… 7

NEWSLETTER OF H. D. U. LIBRARY

『「地球共生社会」と「国際理解・交流」』

—「開発教育」をめざす「経済開発」から「人を中心とした社会開発」へ—

附属図書館長 奥田 寛



0：「私の国際理解」
の出発点

まず「私の異文化体験」からお話をさせていただきます。

私の初めての「異文化体験」は、4、5歳ぐら

いだったと思います。「日本語」、正確に申し上げますと「大阪弁」ですが、生活の周辺には「大阪弁」とは異なる「言葉の世界」が同時にありました。私は、大阪の下町生まれですが、近所に「台湾語の世界」が日常としてありました。私が、外に遊びに出ますと、何人かの大人たちが集まって、

わいわいとやっておりました。まったく耳にしたこともない音声で、意味不明のことを話しておりました。そういう現場にたびたび遭遇し、自分の話している音声とは「異質なものがある」という感覚をおぼろげながらに持ったことを今でも記憶いたしております。「わからない」という心理状態は、往々にして、人間というものを不安にいたします。「わからないもの」を「遠巻きに見る」というあのような不安な感覚です。皆さんが、海外で右も左も分からない、さて道を尋ねるにも言葉がうまく話せない、というあの不安な心境と似たものではないでしょうか。その後、私は、小学校にあがり、歴史を少し学ぶようになってから私の周りにいた人々は、日清戦争の後、「日本」国

籍を持ち？（持たされ）、日本人として生きることを余儀なくされた人々であり、日本敗戦後は当時の「中華民国」の国籍を持つに至った「台湾出身」の人々であることを知りました。さらに大学に進み中国語を学んで、彼らが話していた言葉は、中国語の一方言である福建語の「閩南語」系統の流れを引く言語だということがわかりました。この結論にたどりつくまでに15年以上かかりました。あの「原体験」が現在の私と繋がっているように感じます。異質のものに対する「こだわり」から、中国語教師になったといえます。彼らの「存在」がなければ、今の私が、何をしているかまったく想像が付きません。

私のこの体験のように、皆さんどなたでも、一生のうち何度か「外国」あるいは「外国人」を身近に感じ、「理解しよう」という精神的行為を通し、ある種の感情を持ってそれに関わった経験がおありかと思えます。そういう行為が、「個人のレベル」での「国際交流・国際理解」というものではないでしょうか？要するに個人の数だけの「国際交流・国際理解」があるということです。

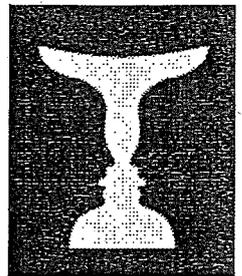
では、この「国際理解・国際交流」を主体的におこなおうとする「人間の心理」とは、先ほどお話ししました「異質に対する興味」以外にどのようなものが考えられるのでしょうか？歴史的に見ますと、「遣隋使」、「遣唐使」は、中国を模範とした国家レベルでの「自己変革、自己改革」の役割を果たしました。また明治政府は、江戸時代の長い鎖国時代の後、「ヨーロッパ」を範として「富国強兵」という国家事業達成のために、文明開化を進めました。「鹿鳴館時代」は、まさに国際交流の時代でした。これも、殻を突き破り、列強に伍すべく、国家の自己変革・自己改革という明確な「目的意識」を体現したものです。このように見てきますと、個人、非個人を問わず「交流」とは、「自己をよい方向に導き、改革・変革する」

という目的意識の強い精神的行為と言えるでしょう。

そこで私たちが、「国際理解・交流」をおこなう場合、相手の国の「人間集団共通の行動様式」、言い換えますと「文化」についての知識・理解が大いに必要となってきます。

1、「ルビンの壺」から見える二つの世界

右の図は、皆さんご存知の「ルビンの壺」です。この壺から見えることは「異文化理解」には、「二人の人間が話し合っている」ように見える目と「壺」に見える目、の二



つの「目」が必要だということです。「意味論」の世界でも、事物には、「表示義（表面的意味）」と「共示義」（「比喩的意味」）がある、と言うのとよく似ております。次の例をご覧ください。

「はと」「アヒル」「犬」「蛙」

日本	×	×	×	×	×	: 非食材
中国	○	○	○	○	○	: 食材

一般的に私たち日本人の食生活において、ほとんど「はと」、「アヒル」、「犬」、「蛙」などは家庭の食卓にあがらないのではないのでしょうか？中国、特に広東省広州の市場に参りますと、これらの動物が食材として生きたまま売られております。このような文化の存在は、私たち日本人にとって想像しがたいものです。日本人は、それらを「愛玩動物」と考えるのではないのでしょうか。数年前、一度、広州で中国の大学の関係者たちと食事をともにしたことがありました。その店の入り口に大きな「鹿」が繋がれておりました。そこを通るとき、私は、かわいい鹿だなあ、なぜここにいるのか、不思議に思いました。その店に入って、出された料理で教えられてわかりました。広州で

は「鹿」も普通の食材だったのです。では、もう一つ例として次の絵をご覧ください。



これは、中国語で『年画』niánhuà と呼ばれ、お正月の時、家に飾る「おめでたい絵」です。今年、2月3日が「春節」（旧正月）です。この絵を見て私たち日本人はどう理解するのでしょうか？私が子供のころ、お正月、床の間に飾っていましたが、掛け軸の絵は、「鶴亀」や「日の出」であったと記憶しております。私たちの「鶴亀」が、実は中国人にとって、この絵にあたります。

では、ここでその「絵解き」をしてみましょう。この「魚」は、何でしょうか？はい。「金魚」です。ね。「金魚」は中国語の発音では「金余」と同音で jīnyú と読みます。中国人は、漢字の読みが同じ、あるいは読みが近いもの同士は、意味が通じるという考えをします。これを「諧音」といいます。日本語で「四」と「死」、「九」と「苦」という具合です。よって「金魚」は、「お金に余裕がある」という意味を表し、まことに縁起のよい魚ということになります。ここに「蓮の花」が見えますね。「蓮」は、中国語で lián と読み、「年」nián とは読みが近いのでこれも意味が通じます。それでこの絵には「今年もお金がたくさん入ってきて生活に余裕がありますように」という中国人の願いが込められていることが分かります。

ここで「国際理解・交流」の基礎となる「異文

化理解」を二つに分類いたしましょう。ひとつは旅行などの「直接的体験」、もうひとつはテレビや映画、またラジオや人から聞いたもの、また、文字言語で書かれたもの、例えば「小説」や「紀行文」などの「間接的体験」（「擬似体験」）と言うことになります。

では、次に、中国と日本の文章から「中国人と日本人の人間認識の違い」について少し考えてみましょう。

2、「顔文化」と「名刺文化」

書かれた物から、作家の人間のとらえ方、切り取り方が典型的によくみられるのは、小説に登場する人物の「初出描写」だと思われます。

浩然という中国の著名な現代作家は、かつて日本を訪れ、初めて社会派推理小説家の松本清張に会った時、その印象を描写して、清張の輝かしい業績と顔の不一致に驚いています。

実は、中国人は、「顔は、心の現われである」という意識がとても強い民族なのです。とにかく人間を「顔」で判断します。

反対に私達日本人はどうでしょうか？松本清張の小説の登場人物の初出描写を幾つか調べて見ますと、典型的に「肩書き」、「名前」の記述が多いことに気がつきます。私たち日本人読者は、彼の作品の冒頭を読んで、登場人物、主人公が「顔なし」人間というのでしょうか、作家から「どうぞ顔はご自由に皆さんで思い描いてください」と、まかされているように思います。どうも、「顔」がない人間でも日本人は不安を感じないで読み進んでいけるようです。「顔」と人間に関する抽象的要素（性格、身分、行為）とは、相関関係がないということでしょうか。

中国人は、逆に「顔の造作」がまず紹介されないとその人間に関する抽象的要素が思い描けな

いようです。「顔」の造作が、小説の中で後に展開する状況の伏線になる働きをしているのです。

中国人にとっては、「顔」の造作が大事で、出世をする顔相に生まれつきましたら、たとえ現在の境遇がそうでなくても、将来必ず出世する、という意識を強く持つようです。出世しない相でも「積善」することで、こころが変わり、顔の相もそれに応じて変化し、「出世」すると考えます。いくら「整形手術」をしても内から「心」が変わらなければ出世いたしません。

かたや、日本人にとっては、「肩書き」、「出世」というものは、本人の努力によって手に入れることができ、「顔」の造作が、「出世」を保証してくれるという意識はあまり強くないのではないのでしょうか？中国人は「心は形に現れる」と考え、日本人は「心は形に現れない」と考えるようです。

3、「地球共生社会」と「国際理解・交流」について

私が言う必要がないほど皆さんも十分に認識されているように現在は、日本一国だけでは発展、生存できない「地球共生社会」です。一国の発展には、他国との「人的交流・技術交流」が必要です。最初に申し上げましたように、国際交流の基本は、繰り返しになりますが、「相手の文化に対する理解及び尊敬」が根本にあってはじめて、相手を「思いやる」という精神が生まれ、それが円滑な国際交流を推し進めると思っています。国際交流には、もちろん「外国語」という道具は確かに「道具」として必要ではありますが、それを操る人の人間性のほうが、より重要ではないかと思えます。

4、「開発教育」のめざす「経済開発」から「人を中心とした社会開発」へ

さて、日本で開発教育を推進している全国的なネットワーク団体「開発教育協会 (DEAR)」は1997年、開発教育の具体的目標を次のようにかかげています。

「開発教育は、私たちひとりひとりが、開発をめぐるさまざまな問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加することをねらいとした教育活動である。その具体的目標は以下の5項目である。

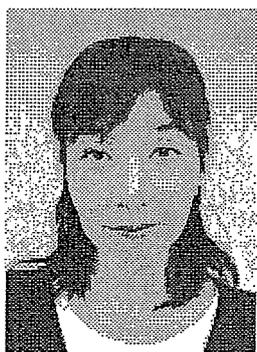
- (1) 開発を考えるうえで、人間の尊厳性の尊重を前提とし、世界の文化の多様性を理解すること。
- (2) 地球社会の各地に見られる貧困や格差の現状を知り、その原因を理解すること。
- (3) 開発をめぐる問題と環境破壊などの地球的諸課題との密接な関連を理解すること。
- (4) 世界のつながりの構造を理解し、開発をめぐる問題と私たち自身との深い関わりに気づくこと。
- (5) 開発をめぐる問題を克服するための努力や試みを知り、参加できる能力と態度を養うこと。」

とあります。この具体的目標の中の(1)が、(2)以下の目標を実行に移す大前提であるのだと、私には思われます。それほどに「異文化理解」、言い換えますと「人権」をふまえた「国際理解」は、「地球共生社会」の根幹としていかに重要であるかおわかりいただけるかと思えます。

(おくだ ひろし)

財政学について学ぶことの大切さ

経済情報学部 教授 横山 直子



私は、財政学の中でも特に租税に注目し専門的に研究を行っており、最近は、消費税に注目が一層強まっている中で消費税の方向性と納税協力費をめぐる問題に着目し深く詳細に研究を進めている。さら

に所得税や住民税に関する日本の徴税、納税制度と徴税費、納税協力費についても常に注目しており、様々な角度から数多くの研究を進めている。いつも研究活動の中でたくさんの本や論文、文献を読んでいるが、研究にとっても図書館の本や雑誌等は非常に貴重な存在となっている。

さて、財政に関する問題は日々の経済や日常に非常に密接に関わるものである。例えば、予算、公共財、財政赤字、租税、年金、地方分権などをめぐる問題である。財政学を学ぶことで、これらの財政をめぐる問題について詳しく理解することができる。例えば、公共財とはどのようなものをいい、どのような特徴を有しているのであろうか、財政赤字の問題はどのようなものなのであろうか、租税はどのようなしくみ、そして特徴を有しているのであろうかなどについてきちんと理解することはとても大切なことなのである。財政をめぐる問題を正確に理解し、考えるためにはしっかりと財政学について学ぶことがきわめて重要である。

ここでは「公共財」に注目し、公共財はどのような特徴を有しているのかなど、①公共財とは何か、

②準公共財、③国と地方の公共財、についてそれぞれ説明していくこととする。

① 公共財とは何か

まず公共財はどのような特徴を有しているのかに関して、政府が供給する公共財の特徴についてみておきたい。

純粋公共財と呼ばれるものは次の2つの特徴を有している。1つ目は、対価を支払わなくても財・サービスを消費、利用することができるというものであり、純粋公共財は、この非排他性という特徴をもっている。2つ目は、財・サービスを利用することから社会の人々すべてが同じだけの利益を得ることができるというもので、純粋公共財はこのような非競争性という特徴も有している。このように非排他性と非競争性の特徴を備えている純粋公共財は、例えば、警察、消防などである。

細かくみると、公共財の中で例えば道路などは利用者が非常に多くなると渋滞が生じることにより時間がかかるなど公共財の利用からの利益が低くなってしまふことが考えられる(混雑現象といわれる)。この場合、公共財からの利益が低下しないように工夫をしなければならないことになる。

② 準公共財

民間財でありながら公共財として供給されているという特質を持つ財・サービスがある。準公共財と呼ばれるものである。

例えば、財・サービスが供給されることで、消費、利用する個人が利益を得るとともに社会全体が利益を得ることができるというものがある。交通を例に挙げると、利用者個人は目的地にきちんと到着できるというような利益を得ることができ、道路の渋滞を緩和することを可能にするというように、社会全体が利益を得ることができるのである。このように消費の外部性がみられるものは公共財として供給され準公共財と呼ばれる。例えば、教育、医療サービスなども準公共財が持つ特徴を有している。

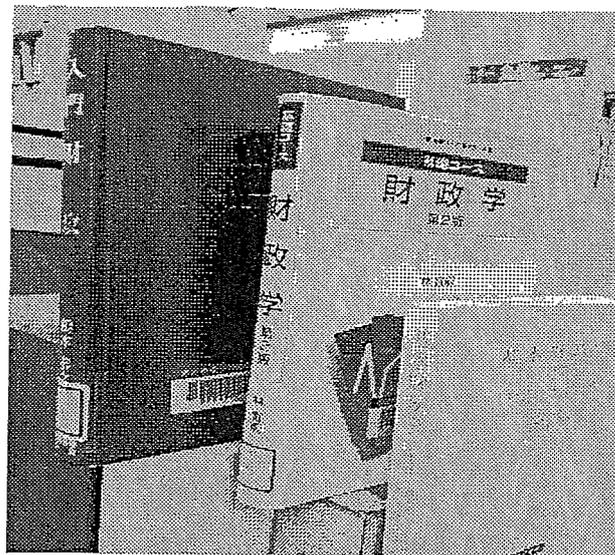
③ 国と地方の公共財

財政の3つの機能（資源配分機能、所得再分配機能、経済安定化機能）のうち、国は3つ全ての機能の役割を行い、地方は資源配分機能に中心がある。その中で、公共財には国が供給するものと地方が供給するものがあり、国が供給する公共財は国民的公共財、地方が供給する公共財は地方的公共財（地域的公共財）と呼ばれ、国は国税を地方は地方税を徴収する。

地方的公共財の中には、公共財の便益が地域内に広がるものと、公共財の便益が地域を越えて波及するものがある。このように公共財の便益が地域を越えて波及する場合に、国から地方への補助金（国庫支出金）が必要になるのである。

（よこやま なおこ）

◎ 財政学をはじめて学ぶ場合には、例えば次の本が参考になる。



・橋本恭之著『入門財政』税務経理協会、2003。
（請求記号：341//HA 2階開架図書室）

・橋本徹・山本栄一・林宜嗣・中井英雄・高林喜久生著『基本財政学〔第4版〕』（有斐閣ブックス）
有斐閣、2002年（4版発行）。

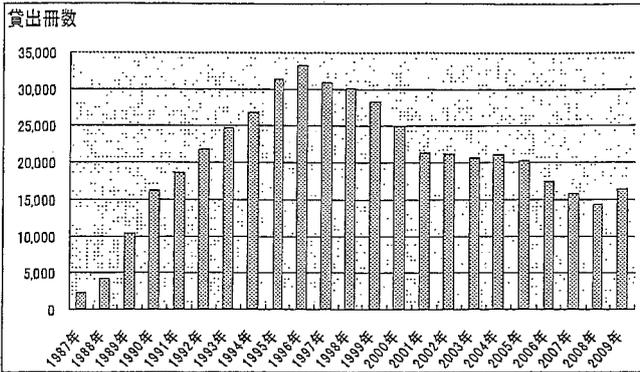
（請求記号：341//KI 2階開架図書室）

・林宜嗣著『基礎コース財政学第2版』新世社、2005。

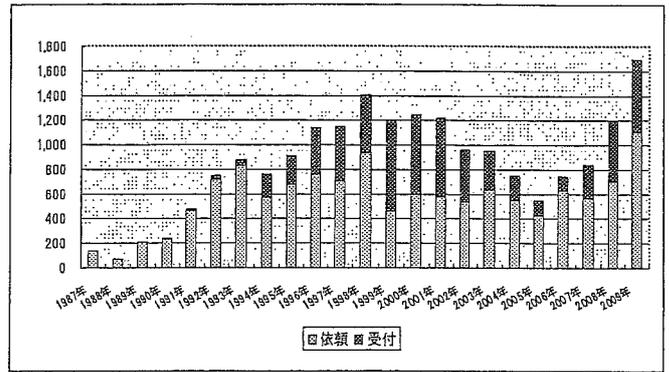
（請求記号：341//HA 2階開架図書室）

姫路獨協大学附属図書館利用状況の推移 (1987-2009)

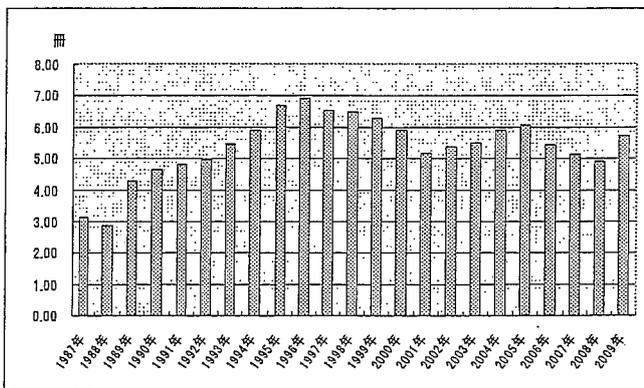
1 : 学生貸出冊数の推移



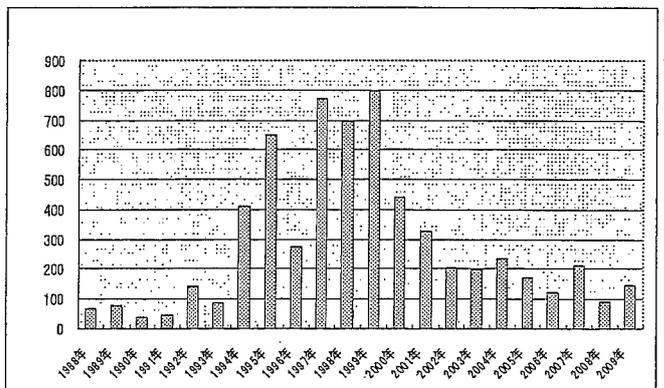
4 : 相互利用件数の推移



2 : 学生1人あたりの貸出冊数 (貸出冊数÷学生数)



5 : 参考質問・利用指導件数の推移



3 : 蔵書冊数の推移 (研究室配架分を除く)

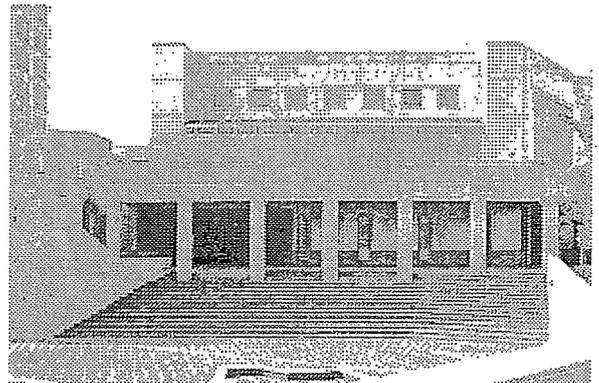
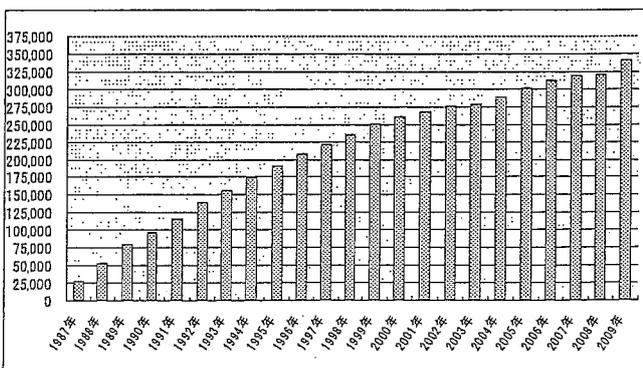


図 書 館 日 誌

[2009]

- 4.2 利用開始
- 4.16 法・新入生図書館ツアー
- 4.17 医(理)・卒論準備ツアー
- 4.21 法・新入生図書館ツアー
- 4.28 第1回図書館運営委員会
- 4.30 法・新入生図書館ツアー
- 5.21 第1回臨時図書館運営委員会
- 6.1 「トライやる・ウィーク」姫路市立広嶺中学校(～6.5)
- 6.2 外(外)・新入生図書館ツアー
- 6.4 医(言)・新入生図書館ツアー
- 6.9 外(外)・新入生図書館ツアー
- 6.16 外(外)・新入生図書館ツアー
第2回図書館運営委員会
- 6.26 第1回阪神地区相互利用担当者連絡会(西岡)
- 6.30 学生図書委員会

- 7.6 学生図書委員会
- 7.16 法・新入生図書館ツアー
- 7.30 第2回臨時図書館運営委員会
- 8.13 夏期休館(～8.16)
- 9.1 大学図書館ハッカージ「Liswave-Jシリーズ」紹介セミナー(福田)
- 10.2 学生図書委員会
- 9.29 第3回図書館運営委員会
- 10.17 大学祭での除籍図書配付(学生図書委員会)
- 10.27 第3回臨時図書館運営委員会
- 11.24 第4回臨時図書館運営委員会
- 12.15 第2回阪神地区相互利用担当者連絡会(西岡)
- 12.26 冬期休館(～1.6)

[2010]

- 1.16 大学入試センター試験に伴う休館
- 1.26 第4回図書館運営委員会
- 3.26 春期休館(～4.1)

平成 22 年度 附属 図書館 運営 委員

図書館長	奥 田 寛
外国語学部	
外国語学科	初 谷 智 子
ドイツ語学科	鳥 谷 部 平 四 郎
英語学科	初 谷 智 子
中国語学科	原 由 起 子
日本語学科	大 曾 美 惠 子
スペイン語学科	白 井 智 子
韓国語学科	高 橋 学
法 学 部	
	松 岡 伸 樹
	高 橋 克 紀
経済情報学部	
	横 山 直 子
	鉄 谷 健 介
医療保健学部	
理学療法学科	田 中 み どり
作業療法学科	横 井 賀 津 志

言語聴覚療法学科	鈴 木 正 浩
こども保健学科	大 塚 優 子
臨床工学科	小 寺 宏 尚
薬 学 部	
	通 山 由 美
	炬 口 真 理 子
法務研究科	渡 邊 卓 也
事務系職員	重 枝 一 喜

平成 22 年度 附属 図書館 学生 図書 委員

外国語学部		
英語学科	4 年次生	西 田 真 也
医療保健学部		
作業療法学科	2 年次生	西 村 奈 緒
		杉 山 拓
こども保健学科	4 年次生	内 田 このみ

姫路獨協大学附属図書館報 さぎそう No. 36

編集・発行 姫路獨協大学附属図書館
姫路市上大野 7 丁目 2-1 (〒670-8524)

2011 年 1 月 24 日発行

ISSN 0915-8189
電話 079-223-6506
Fax 079-223-0928
e-mail library@himeji-du.ac.jp